

出版までの経緯

根津真知子

1. はじめに

1989年以来開発してきた初級教材がようやく1996年9月の秋学期に何とか間に合って、英語タイトル「Japanese for College Students Basic Vol .1,2,3」、そして日本語タイトル「ICUの日本語」で講談社インターナショナル社から出版された。足掛け8年間に及んだ末のまさに生みの苦しみとともに産声をあげた初級教科書であるが、日本語初級教材開発の経緯については当センターの1991年度の紀要1に詳しい報告がすでに出ているので、ここでは開発の経緯に関しては簡単にまとめ、その後の出版までの経緯について報告する。

2. 初級教科書開発の目的

まず、初級教科書開発の目的から簡単に述べてみたい。ICUでは1953年以来外国人学生に対する日本語教育が正規の学科目として始められ、1963年に出版した大学生のための日本語教科書「Modern Japanese for University Students」を長年使用してきたが、80年代終りになって現代の学生のニーズにあった全く新しい日本語教科書を最新の言語学、外国語教授法理論に基づいて作ろうということになった。その動向の背景の一つには、63年のModern Japaneseの時代は構造主義言語学、オーディオ・リンガル法が盛んで、教科書にもそれが色濃く反映されていたが、その後言語理論で構造主義が批判され、その理論に基づいて開発された教授法であるオーディオ・リンガル法も批判され、新しい言語理論また60年代から研究分野として確立され始めてきた第二言語習得理論を基にした多くの外国語教授法の出現などにより、ICUの日本語教育プログラムを担当している現場の教師たちから新しい教科書開発を望む声が出てきたということがある。もう一つは、60年代の始めくらいまでの日本語学習者は将来日本研究分野の仕事に携わる人が多く、学習目的が主にアカデミックなものであったが、80年代、特にその後半の5年くらいで日本語学習者数が激増した頃からの学習者の学習目的が多様化してきたことが挙げられる。その学習目的の多様化を詳しく見る意図で88年に日本語科に対してアンケート、そして89年の夏季講座でニーズ分析を実施したところ、ICUでの日本語学習者の学習目的は「下のレベルでは日常的コミュニケーション、特に話す能力を伸ばすことを目指す学生が多いが、中級から上級では読み書き能力を重視する学生が多い。学生の専攻は社会科学系、特に国際関係、ビジネス、政治学が多いが、電子工学や文学、コミュニケーションなどの他に、日本の社会や文化をより深く理解するために学ぶ学生もかなりいる。全般

的にはそれぞれの専門分野で日本語運用能力と日本社会への理解を武器として専門職につくことを目指しているといえるだろう。」(ICU日本語教育研究センター紀要1：村野)という結果を得た。これに基づき、新しく開発する初級教科書のゴールを次の四点とすることにした。

1. 日本語の基礎的な言語形式が正しく使える。
2. 日本語を場面、機能、意味に応じて使い分けることができる。
3. 身近なことを日本語で表現できる。
4. 言葉の背景にある日本社会への理解を深める。(同上)

このゴールに沿って開発され始めた教科書は、幾回にもおよぶ仮印刷版、二回にわたる試用版を経て、出版に至ったのである。第二回目の試用版から最終的な出版まで編集責任者としての立場にあった者としてその間の経緯についてふれてみたい。

3. 試用版から完成版へ

1994年6月の第二試用版の時点では初級教科書は以下の分冊によって構成されていた。

1. 本冊
聴き・話し・読み・書きの四技能のうち、聴き・話しの二技能を使って、上に示した四つのゴールを達成する。
2. 文法解説書
3. 読解テキスト
4. 漢字テキスト

この試用版を94年9月の秋学期から使い始め、初級コース担当教師そして学生たちから教科書についてのコメントを出してもらおうと同時に出版に向けて出版社との交渉に入り、最終的には講談社インターナショナル社から1996年9月の出版を目指すこととなった。その際、教科書の構成上の大きな方向転換をする次の条件が盛り込まれていた。

1. 本冊と分冊で技能別に分けられていた教科書を一冊に統合すること
2. ICUのカリキュラムに合わせて33課の構成にしていたものを30課でまとめる
3. 音声テープ作成
4. 教師指導書作成

そこで、初級教材編集委員会で検討し、合意した事柄は以下の点であった。

1. 読み教材と漢字教材と本冊との語彙・文法項目の関連をいかに調整するべきか：

初級教材の中での読み教材と漢字教材の基本的方針（日本語教育研究

センター紀要 1 参照) は踏襲しながらも、語彙と文法項目は元の本冊(聴き・話し)に準拠するようにする。読み教材での新出語彙は読みの本文の後に語彙リストにする。漢字教材の「読み方を覚えましょう」と「新しい漢字」セクションの語彙には英語で意味を付ける。

2. 全 33 課構成であったものをどのように 30 課に削減するか：

第二試用版では全 33 課が三部に分けられ第一部が 1 課から 11 課、第二部が 12 課から 22 課、第三部が 23 課から 33 までとなっていた。各部の最初の課が各学期の始めにあたるような構成になっているので、各部の最初の課、すなわち 1、12、23 課は自己紹介あるいは自分について話すことが課の目標になっていた。このようになっている 33 課を 30 課に減らすのであるから、31 課から 33 課を削るというような単純な手直しでは済まない。試用版での三部構成は出版では三巻で各巻 10 課とすることになっていたもので、各巻の最初の課である 1、11、21 課に試用版の 1、12、23 課で扱う内容がくるように入れ替えや組み直しをすると同時に中級送りにする学習項目を決定し、全 30 課でまとめる作業をする。

その結果、各課の構成は以下ようになった。

4. 完成版の構成

LISTENING AND SPEAKING

OBJECTIVES：その課の目標を明示

POINTS：その課で学習する言語活動を機能別にあげた項目

SENTENCES：その課の文法面での学習項目を簡単な文の形で明示

フォーメーションで置き換え練習をする

EXPRESSIONS：その課のドリルとロールプレイにでてくる表現・

終助詞・接続詞・接続助詞・副助詞・間投詞・短縮

形などの会話をスムーズに行うために必要な表現

フォーメーション：発音や文法の正確さを身に付けるための文単位の練習

ドリル：形の正確さと機能や場面を重視した談話単位の練習

ロールプレイ：その課の学習項目に限らずその時点までに学習した語彙・文型・表現などを総動員して正確かつ適切な言語非言語コミュニケーションで対話相手と課題を達成する練習

GRAMMAR NOTES：聴き・話しのセクションで導入された文法項目の説明を英語とする。

READING：

WRITING：

3. 音声テープには教科書の全体、あるいは、どの箇所を入れるべきか：
学習者がテープを使って練習する際の使いやすさを最重要視して、学習者の発話練習部分の間もテープに入れることにしたため、テープの長さの制約を考えて、音声テープには GETTING STARTEDと LISTENING AND SPEAKINGのフォーメーション全部とドリルのモデル会話だけを入れることにする。

4. 教師指導書の作成を誰が担当するか：
初級教科書編集責任者である根津、そして試用版の本冊に初級教材開発の当初から関わってきた平田と村野、の三人が作成する。

これらの合意に従って作業が進められ、教科書と音声テープは予定通り1996年9月、教師指導書はほぼ半年遅れて97年春に出版された。

5. 今後の課題

時間的制約の中で四技能の分冊を統合するのは予想をはるかにこえた困難な作業となった。統合はしたものの、その統合された教材を一度も試用せず、LISTENING AND SPEAKINGセクションと READING、 WRITINGセクションとの整合性に問題を残すこととなった。今後の改訂に向けて、この技能別のセクション間での整合性を十分持たせることが課題である。